様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５１０３１３

研究課題名（和文）ブータンの農村社会内における経済的格差の要因：稲作地域と畑作地域の比較研究

研究課題名（英文）How is the economic inequality produced in rural Bhutan?

研究代表者
上田　晶子（Ueda, Akiko）

名古屋大学・国際開発研究科・准教授

研究者番号：９０４６７５２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ブータンの農村社会内部における経済格差の状況に焦点をあて、貧富の差が作り出されるメカニズムの一端を明らかにすることを目的とした。そのメカニズムにおいて、村落社会内のカネ、モノ、労働力の動きと土地所有の形態に注目した。
　土地の賃借条件の差が稲作地帯と畑作地帯の格差の創出を対比させる大きな要因であることが明らかになった。また、労働力の動きに関しても、貧しい農民が借米とその利子の返済を労働をもって行うことがあることが観察された。また、農村から都市への人口流出による労働力不足によって、農地を借りる条件が、借地人に有利な方向へかわりつつある。

研究成果の概要（英文）：This study aims at examining bow economic inequlity is created in rural areas in Bhutan. It focues on the movement of money, materials and labour as well as the terms of renting agricultural land.
The main findings of the study are firsly the terms of renting agricultural land is strikingly different between wet land (for paddy) and dry land (for grains other than paddy and vegetables). The tenants have to pay much more in the case of wet land, and thus this is one of the areas in which money (or harvest) moves from poorer farmers to better off farmers. Moreover, the poorer farmers return the borrowed rice and its interests by working for the rice lenders who are often bettwe off families in the community. This is identified as the second factor which leads to inequality.

研究分野：開発研究

キーワード：経済格差　農村　ブータン

１．研究開始当初の背景

筆者は、1996 年以来、ブータンの開発とそれに伴う社会的、経済的変容について、様々な視点から研究を行ってきた。ブータンの農村部におけるフード・セキュリティの状況についての分析では、村落内の経済的格差が重要な問題として浮かび上がってきた。更に、稲作地帯と畑作地帯では、村落社会内部でのカネ、モノ、労働力の動き、土地所有の形態が異なっていることが観察された。このような研究経過から、稲作地帯と畑作地帯の比較をしながら、村落社会内において、経済格差が生まれるメカニズムの解明の必要性を感じた。

ブータンの貧困問題についての調査は、ブータン政府が行ったものがいくつかある（NSB (2007), Planning Commission (2007) など）。これらの調査では、全国的な貧困ラインを定め、それに従って、貧困層がどれほどの割合を占めるかの比較を、都市部と農村部、そしてゾンカック（県）ごとに行っている。これらの調査結果は、農村部に貧困層が多いこと、そして、どの県に貧困ライン以下の生活をしている世帯が多いかを明示しているが、県よりも更に下位の行政レベルであるギョークごとの比較は示していない。（本研究で、対象とする「村落社会」とは、このギョークのレベルをさすものである。）また、これらのブータン政府による調査は、貧富の差が生まれるメカニズムに踏み込むものでもない。

国内外において、ブータンの村落社会内での格差についての学術研究はほとんどなされていない。ブータンの農村を題材とした研究は河合 (2007) や宮本 (2009) などがあるが、どちらも村落社会内での経済格差には言及していない。また、経済格差や貧困の研究は、Mehta(2007) や Santos and Ura (2008)があるが、これらも上記のブータン政府による調査と同様に、国内の地域間格差に注目したもので、村落内の格差を分析したものではない。

２．研究の目的

本研究は、ブータンの村落社会内部における経済格差の状況に焦点をあて、貧富の差が作り出されるメカニズムを、稲作地帯と畑作地帯を比較しながら明らかにすることを主目的とする。比較分析にあたっては、特に、村落社会内のカネ、モノ、労働力の動きと、土地所有の形態に注目し、村落社会外部とのつながりも視野に入れつつ、経済的、社会的、文化的要素を検証する。

３．研究の方法

ブータン農業省をカウンターパートとして、農村地域での聞き取り調査を主なデータ収集の手法とした。ブータンの農村部におけるカネ、モノ、労働力の動きと、土地所有の形態は、社会経済的変化に適応しながらも、ブータン西部、中央部、東部のそれぞれの地域の従来の慣習の要素を残しており、その点から、現地調査は、これらの 3 つの地域に分けて、行うことが適当と考えられた。農村部での聞き取り調査のほかに、ブータン政府農業省やブータン王立大学、農村部での経済社会事情の歴史的背景について知見をもつブータン人研究者との意見交換も行うことにより、より、多角的に分析を行った。

実際には、ブータンの 20 のゾンカックから 9 つを選定し、それぞれから 1‐3 つのギョークを選んで合計 16 ギョークで調査を行った。それぞれのギョークでは担当の農業普及員と畜産普及員の協力をあおぎ、また、ティンプの農業省からも研究に協力する形で同行をしてもらい、農業省の全面的な協力を得た。ギョークごとに 12－15 世帯のサンプルを選定し、世帯ごとにインタビューを行った。ギョークの選定にあたっては、畑作地、稲作地をバランスよく選定することはもとより、市場へのアクセスのよさ、高度差による生業形態の差を考慮し、かたよりがないように選定した。インタビューを行う世帯の選定にあたっては、事情をよく知る村長と農業普及員の知見を得、裕福な暮らしをしている農家、貧しい農家、その中間の暮らし向きの農家の三つに分け、偏りがないように選定を行った。

４．研究成果

（１）全般に稲作地帯のほうが、経済格差は大きいといえる。しかし、農村部の過疎化により労働力不足に悩む地域になるほど、収穫作物の小作の取り分が多いので、借地による経済格差の拡大は是正される傾向にある。

（２）稲作地帯の方が、畑作地帯よりも、経済格差が大きい要因はいくつかあげられる。一つ目は、土地の賃料である。貧しい農家は、土地所有の面積が小さいことが多く、そのため同じ村落内の比較的裕福で土地をより多く所有している農家の水田を借りて耕作することが多い。その場合、収穫の 35－50%を地主に納めることで土地の賃料となる。しかし、この点は、前述のように過疎化と労働力不足の度合いにより、賃料となる地主の収穫の取り分が減ってきている地域もある。これに対し、畑作地の賃料は、畑作地を換金作物の栽培に使用し、順調に収穫が得られた場合、収穫物からの収入の 10%ほどという地域が見られた。同じように貧しい農家が比較的裕福な農家から土地を借りても、貧しい農家から裕福な農家へのカネとモノの動きは、畑作地帯の方が少ない。二つ目は、集落内で発生する様々な「料金」である。これには、耕耘機やチェーンソーの使用料、また、籾を脱穀しコメにするための脱穀機の使用料などが含まれる。いずれも、比較的裕福な農家が所有し、貧しい農家はそれを使用し料金を払うという立場におかれる。

（３）農道の開通による経済的な利益は、比較的裕福な人々に大きく、農道の開通が格差の拡大に貢献している可能性が示唆された。例えば、農道の開通以前は、村落に物資を運ぶ方法は人が担ぐか馬に乗せて運ぶかというのか主な手段であり、開発に伴う学校の建設や、電線の敷設工事等にともなう機材や物資の運搬は、貧しい家庭にとっては、貴重な現金収入の道であった。しかし、農道の開通により、そのような物資は主に車で運ばれるようになり、ポーターとしての仕事は激減することになる。その上、生活に余裕のある世帯は、小型の乗用車を購入しそれに村の人びとを近くの市場や県庁所在地まで載せて行き、タクシーのように料金をとるということがはじまる。貧しい人から、比較的裕福な人へカネが動くこととなり、貧富の差がひろがる一因となる。

（４）トラクターや耕耘機といった農業機械の導入も、比較的裕福な農家に利益が大きく、村落社会内の格差の拡大に貢献している可能性が観察された。これは、機械の導入による労働力の削減が、自己の農地の作業時間を減らすだけでなく、慣習的に行われている農作業の相互扶助にかかる時間も削減しているという意味である。耕耘機をもっているのは、比較的裕福な農家であり、耕耘機をもって行えば、農作業の相互扶助に使う時間は、手作業で行う場合の半分から４分の１で済む。しかし、相互扶助を受けた側は、そのお返しの労働は、農業機械をもっていない人々は、手作業での時間数での作業を返さなければならないからである。

（５）本研究の限界として、季節移動をしているコミュニティの存在が挙げられる。ブータンでは、夏と冬の２つの場所に農地と家をもち、季節移動をしている世帯が存在する。その場合には、同一世帯で稲作地と畑作地両方を所有しており、本研究が前提とした稲作地と畑作地のコミュニティの比較研究という概念には当てはまらない例となっていることに気づいた。このように２カ所に家と農地をもり、その両方を維持、管理していくには、家庭内に労働力が十分あることが必要であり、農村部の過疎化が進行する中で、夏か冬のどちらかの土地を耕作せずにいる農家が増えてきているのも事実である。また、相続の過程で、夏の土地と冬の土地が別々の人物に相続されることも多くあり、季節移動は減少の傾向にあることも観察された。

（６）本研究は、学術的な成果とともに、政策提言など、より実践的な面での成果の還元も志向したものであった。その点において、毎年の調査の終わりには、農業省において、貧しい農家を支援するより具体的な方法を提言し、また、農業省の関連部局と意見交換を行ってきた。耕耘機などの農業機械を、個人所有ではなく、コミュニティとして共同所有し利用するなどの動きが出てきたことは、研究の成果に照らしても適切な支援の方法であると考える。

（７）現地調査とともに、各地域の歴史や社会的背景に詳しい人々からも、多くの知見を得た。特に、自分の土地をもたず（あるいは、たいへん限られた面積の土地しかもたず）、土地所有者から土地を借りて耕作している農家が多い地域では、土地所有の歴史的背景やその変遷についての有意義な知見を得ることができた。そのような状況を貧しい世帯の生活の改善につながるように変えていくには、開発のプロジェクトだけでは手に負えず、ある意味での制度的、政治的な変化が必要であることの理解につながった。

（８）稲作地の所有者は、農家だけではなく、寺が所有している場合も多くあることが判明した。このような土地の存在を含めて貧富の格差の研究を進めていくことは、今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①上田晶子　(2014)「ブータンの GNH の思考」『地域開発』、599 巻、46－50、査読無、URL 無
②上田晶子（2011）「関係性、充足、バランス：国民総幸福量（GNH）の視点と実践」『科学』540‐545、査読無、URL 無

〔学会発表〕（計 8 件）
①上田晶子　「関係性から読み解く GNH（国民総幸福）」第五回ブータン文化講座（招待講演）、2014 年 12 月 4 日、京都大学（京都府京都市）
②上田晶子　「『個』から『関係性』へ：ブータンの国民総幸福（GNH）の視点から考える」　国際開発学会第 25 回全国大会、2014 年 11 月 29 日－30 日、千葉大学（千葉県千葉市）
③上田晶子　「よい近代化、わるい近代化」第 3 回ブータンシンポジウム、2014 年 11 月 29 日、JICA 地球ひろば国際会議場（東京都）
④ Akiko Ueda “Food Security and Coping Strategies in Rural Bhutan: Between Self-Interest and Altruism”, Agrarian Change Seminars, 2014 年 1 月 23 日、ロンドン大学（イギリス、ロンドン）
⑤ Akiko Ueda “Food Security and Coping Strategies in Rural Bhutan”, International Symposium: Anthropological Study of Food Security, 2013 年 12 月 19 日－20 日、大阪大学（大阪府吹田市）
⑥上田晶子　「ブータンの農村におけるフード・セキュリティ」第五回京都大学ブータン研究会（招待講演）、2013 年 4 月 25 日、京都大学（京都府京都市）
⑦Akiko Ueda “Chilies and Food Security in Rural Bhutan”, Monthly Seminar, 2013

年 2 月 28 日, College of Natural Resources (Lobesa, Bhutan)
⑧ 上田晶子 「ブータン農村部のフード・セキュリティと労働力不足の問題」フード・セキュリティの人類学的研究ワークショップ、2012 年 2 月 27 日、大阪大学（大阪府吹田市）

〔図書〕（計１件）
① Akiko Ueda (2014) “Understanding the Practice of Dual Residence in the Context of Transhumance” in S. Kumagai (ed.) Bhutanese Buddhism and Its Culture (Kathmandu: Vajra), 153-170

６．研究組織
(1)研究代表者
上田　晶子　(UEDA AKIKO)
名古屋大学・国際開発研究科
准教授
研究者番号：90467522